

ダンテの人间像

大沢章

デ・モナルキアの中で、ダンテは自然是神の歩かれた足跡であるという意味のことを書いております。信仰的立場から云えば、このことはよくわかることです。自然是神の業でもあるが、同時に神の歩かれた足の跡でもあります。何故ここでそういう古い時代の人をとつて来て考へるのか。ことに國のちがうイタリアの、それも七百年も前に生きていた人の思想を取扱うというのは一十三世紀の六十年代に生れて十四世紀の二十年代に死んだ人一ずいぶん今日の日本の問題としてはいわゆる現実性、(アクチュアリティ)がないテーマであるとも思われるでしよう。

しかし、いうところの現実性の意味には、二つのものがあると思います。今させまつて我々の人間生活に非常に必要な緊要な関係にあるものも、むろん現実的な意味をもつてゐる。我々の國の經濟の問題、法の問題、政治の問題——もし政治家であるならば、国会が衆議院がどうなるかという問題——

現実にさし迫つた非常に大きな問題、これらはみんな現実的な問題にちがいありません。しかし同時に、今日も必要な大事な問題だが、昨日もそうであつたし、明日もまたそうであるし、五年後も十年後も百年後もお互の民族・國家と、或いは世界と人類にとつて大切な意味をもつような問題も、現実的な意味をもつ極めて重要な問題で、今日の生活にそれを無視することは大きな誤りである——そういうことがらもあると思う。

二つの性質の違つたものが同じアクチュアリティといふものの中に含まれていはしないか。そういう意味で、そういう数百年前の人を今捉えて來て考へてみると、もつてゐる意味がないわけではないと思う。もう一つは、人間精神の自由という点から考へてみると、私共人間のもつ風土といふものは決して物理的な自然的な、こういう今、朝あたたかつたけれども雨のようになり、少し陰鬱になり冬が近づいた日

本の十一月の風土氣候、そういうものだけではないようにも思ふ。我々の知性の風土がある。或いは精神の風土といつてもよいでしょう。

その問題は和辻哲郎さんが「風土」という書物の中でかつてのドイツの留学時代のハイデッガーの講義から受けられたものをもとにして書かれた書物があり、古い形容をすれば洛陽の紙価を高からしめた著名な著述もあります。私共は自由に、その意味では知的な風土を替えるといふことが云えるのではないだろうか。

今から四、五年前にアンドレ・モーロアがドイツで出ていた Universitas という雑誌に寄稿した文章を読んだことがあります。その雑誌の論文の中で、彼はドイツ語で書いてある一題は「文学体験と文学認識」(リテラチュア・エルケーヴニス・ウント・リテラチュア・エルケントニス) といふ論文の中の一節で、意味の深い事を云つてゐる。自分はヨーロッパが再び自己を建設することができるであろうと思う。そして自分の祖国(フランス)が精神の十字路としてとどまることを信ずる。

—クロイツエッヒ・テス・ガイステス(Creuzweg des Geistes)

と云つてゐる。つまり精神のクロイツエッヒとなることじつよ。それは例えば、沢山の道路が交つてゐるような広場といつてもよいでしょう。自分の祖国は精神の色々の道が集つてくるその広場のようなものである。だから他国の文化を取り入れることが非常に大事なことである。そして他国の文化

をとり入れるということは、決して独創的に物をつくりだすことを妨げるものではない。むしろその反対に、それは例外でみれば我々がよき栄養となる食物や飲料を摂取することに似ている—精神の食物としては、だからそれをとり入れることは独創的なものをつくりだすことの妨げにはならない。むしろその反対なのだとということを、彼はボール・ヴァーリーの認識を借りて述べています。モーロアは「他のものの他のプシケの緯度に住もうとするすべての偉大な企ては、結局は父の家への復帰を以つて終る。」ということをもつてその文章を終つています。

さすがにやつぱり文學者ですから、我々法律学者などよりも用いてゐる言葉がもつと詩的なひびきをもつております。他の國のもの、そのプシケの緯度に住む—東京が北緯三十七度位でしょうか、イタリアの緯度が何度か?しばらく我々は他国のプシケのその緯度に住むことをこれから試みてみたことと思う。今それをヴァーリーの言葉を借りてモーロアは云つたのです。

その他の國のプシケの緯度に住もうとする、生きようとするすべての偉大な努力といふものは、結局は父の家の(アーティハウス)へのハイムケアをもつて終るのだ。だがただ復帰するだけではなく、それはあくまでもシェッペリヒに、新しいものを生みだす力にならなければならぬ。

独創的にオリジナルなものをつくりだすために、他國のプ

シケを我々を探らなければならない。そのためにはコメーデイアを読みファウストも読むのです。だから他の文化をとり入れるということは、決して独創的につくりだすということを妨げることではなく、それどころかむしろその反対なのである。その基礎が浅く、低い山ならば、その裾野も小さく浅いでしまう。しかし富士のような山ならば、我々が汽車で眺めても裾野が広い。人間的な働き、生活についても同じことが云えるのではないでしようか。しかし結局は、父の家に帰つてくる、そのことをもつて終るのだ。そしてこのお互の人間の生といふものは、生きておるといふことは、それは非常に沢山の神祕的なものをもつてゐる。ことに他の国といふものは一或いはその他国人といつてもよいでしよう。しかしこの場合、國のことです。一人間関係に移せば他人といふものは自分にとつて生の神祕だ。(ダス・ミステリーム・デス・レーベンとモーロアはいつてゐる) 生のミステリームだ。わからないうものを持つてゐる。人間とは何か?

片岡美智といふ人が何かの雑誌で「人間この複雑なもの」という題の文章を書いています。しかし複雑なものだといふだけでは決して人間がわかるはずがない。いろいろ複雑なもののが他にもあります。もつと内容をよく分析し、いろいろなものをもつてることを明かにしなければなりません。例えば、三十年も共同の婚姻生活にある者、夫と妻とは互に他をよく知り合つてゐるはずですが、しかも夫の心のかげ、妻の心の襞、そういうものをお互にすつかりは捉えているわけではなく、よくわからない心のかげ、その陰影もあるのだろうと思ひます。

ルーヴル展で小さなステンドガラスのある所には、光が明暗となつてキリストの十字架像クリデシッソがある。一寸印象的であつた。もちろん大きなゴチックの聖堂や立派なカテーテルのステンドガラスとは比較できぬほど小さいもので、そこにあるのは一つのイタリア人の所謂キアーロ・オスカーロの明るいものでもない、白日のまばゆいものでもない、さればとて暗いのでもない。明暗の何か心の陰影といつても充分でない。心の襞のわかつたようでもからぬものがそこに漂いでいる。夫婦の間でもそうだろうし、友人でも師弟の間でもそうであるでしよう。そこには神祕といつては強すぎるかもしませんが、充分につかめない心の襞やかけがあるので。そうしてそれが人間といふものかも知れない。しかしこの他なる者、ことに他の國のもの、それがなければその他の國が自己を疎外して、自己の他にある、その遠い離れて在るといふ、一今イタリアは日本と離れてある、その離れているといふプロスペクティヴ(展望)がないならば、我々の生といふものが低俗なものに陥る危険がある。他國なるものの不斷の展望の中において生は常に自らを若くすることができる。モーロアは他國の文化について、そういう意味のことをいつていふ。ごく簡単に申したのですけれど。

人間性の中には沢山の山やその山の麓のようない、片方は陽があたつており、片方は陰になつて違つて見えるような面がある。画家ならば、それを捉えて画面に描こうとするでしょう。このようにわかつたようなわからないようなものが人の心の中にはあるのです。

私はかつて毎日アルプスのモンブランを眺めて二年半ほど暮したことあります。けれども、モンブランの色、その雪の色——いわゆるアルペンブルー——は時間によつて色々に見えます。人間の心の變化が容易に分らず、五十年も交つていて後にやつとあの人にこんな美しい面があつたのかという事を発見することもあるのが人間の姿です。

人間とは何かということは、生の神祕として他なるものがある事を考へることによつてのみ知りうるにすぎない事であると思ひます。それを國でなく人について考へるならば、他人があるといふことが、我々各々が自分を知る上にどれほど役に立つことかしれません。他人がないとしたら、自分がどういふものになるか。この問題にモーゴアはふれたものだらうと思います。

カトリック教会では四旬節の灰の水曜日のミサのはじまる前に、司祭が灰を祝福して聖体拜領台の前にひざまく信者達の頭にそれをぶりかけて、次の意味深いことばを述べます。「人間よ汝塵なればまた塵に返ることを記憶せよ。」と。一年に一度人間が塵であり塵に返るということを考へること

は、意味のないことではなかろうと思ひます。人間として他の人間を考へることなしに人の本質、人間性とその尊嚴、人間の自由などのことをよく摑むことができるかどうか。そして他国をよく知るということは何を意味するか。他国の文化をとり入れるということは一結局それがお互の文化を養う力となつて自國の文化を独創的につくりあげて行くということに他國の文化的な授取が役立たないならば、それは單なる猿真似にすぎなくなるでしよう。結局は父の家に戻つてくることに終るということばの意味は深いと思ひます。それだからこそ、多くの文化をとりいれ、それらを交流せしめとり入れるということは、決して良きものを生むことの妨げになるものではありません。このことをモーゴアは云おうとしたのだろうと思ひます。

一二六五年に生れ、そして一三二一年に死んだ、わずか五十数年の一生を生きたにすぎなかつた一人の詩人の人間像を描いてみると、私どもがやはり自己をしばらく十三・十四世紀のイタリアの世界に移して、そこに苦しみ生きた一人の自由な精神が、人間にについてどういう考えをもつていたかを探ることによつて、お互の人間性の尊嚴の問題をもう一度よく認識し直して見る、そしてお互の人間性の尊厳性についても責任を深く感じ、考へる。ダンテの人間像の考察がその事のたしになれば、私の話が皆様に無駄な時間をお過ごさせしたことにならないのではないかと思ひます。

ダンテの作物、ことにコメーディアの中で人間がどういう風に描かれているかという問題を、これからテーマとして見ていただきたいと思います。

我々は伝記をも読んで、ダンテの人柄がどういうものであつたかを多少は知っています。しかし何よりも彼の作品である詩の眞実の中にかくされている人間も探し出すことに努めなければならぬと思います。それからもう一つの意味は、ダンテがどういう人間であつたかということであり、他の一つはこの詩人は人間といふものについてどういう考え方をもつていたかということについて考えることになります。

ダンテの人間観、或いは人間についての認識、或いは信念はどんなものであつたか。そして今一つ、ダンテはどういう人間であつたか、この二つの点からコメーディアの中にかくされている人間を探し出していくことができると思います。だから伝記はある頼りにはなるけれども、矢張りその人の一番よくあらわれている筈の、その作品をもとに見ていく方がよいと思います。それでは面倒でも、そのコメーディアにぶつかろうと思うのです。

この二つの問題は実は一つで、一一つであつて一つの問題で、内面的に関連をもつていています。何故ならその人の一人の詩人が、人間といふものについてどういう思想をもつておつたか、またどういう信念を抱いておつたかということは、他の面から見ればその詩人が自己の人間を形成する

についてどういう人間についての型なり理念なりを胸に描いておつたかということになつて参ります。人間をこういうものだとコメーディアの中で描いたことはダンテそのものの人間形成と決してはなれてはいないとします。その内面的な関連からみればこの二つの問題は、実は柄の二つの面のよう密接な内面的な関連をもつておる一つの人間認識の問題だと思います。ダンテの人間体験がダンテの人間認識を深めたところも云えないことはない。ことにコメーディアが御承知のようにダンテに生きた人としては最も大きな影響を与えた人の一人であるペアトリイチエを不斷に考えつづ書かれたことは大切な点であります。或る人々の中には、その歴史的の現実に生きたことを問題にするものもあります。けれども、今日においてはそれが実際に生きた人であるということについては大体に信じられているといつてよからうと思います。一人の女性——よく御承知のペアトリイチエがダンテの生涯と作品の上にどう意味をもつたか。コメーディアはこのペアトリイチエについての彼の悩み、想い、あこがれ、愛を描いたものであり、それは *Vita Nuova* 「新生」 の完成したものとみてよいのであります。

コメーディアの深い意味をよく理解する為にはヴィーラ・ヌオーバをよく読まなければならぬはずである。何故ならその「新生」の終りの章において若い詩人は、もし神が自分に将来になおいくばくかの生命の日をゆるし与え給うならば、

自分は一人の女性について未だかつて云われたことのないもの書きたいという意味の願いをもつて最後の章を結んでいます。その願いがコメーディアの中に実現したといつてよろしいのであります。そうすると「新生」はコメーディアの序曲ということができるかもしれません。少くともダンテの精神の発展の歴史から見て。

コメーディアの中にダンテの人間觀が最もよく出ていると思うので、今日はヴィーサ・ヌオーバにふれることは時間の関係からもひかえまして、コメーディアを中心として人間が最もよく出ている、また彼の人間についての思想が最もよく出ているコメーディアの詩を中心にしてダンテの人間像をできるだけ描いてみたいと思います。

言葉をかえて申せば、コメーディアの解釈、或いは鑑賞の鍵は、ダンテといふ人間そのもの、一人の独立で自由な人間詩人であるが、また同時にスコラの学者であつたスコラの学者であり、哲学においても相当の深いものをもつていたーーそのダンテといふ一人の人間が、コメーディアを読むに当つての一番よい鍵であるとも云えると思うのであります。

人間のことについてダンテは色々くるしみ、それについて述べて居りますが、人間的な願いをもつておつたことは明らかであり、今日からみれば子供っぽいとさえ思われるような願いをさえもつて居つたようであります。流離の中に二十年を過ごし、國から國へと遍歴の長い旅をしたといつ追放のく

るしみをなめた中で、パラディエーヴの第二十五歌のはじめの方で歌つてゐるところは印象的であります。フィレンツェが自己に対し非常に背恩的であつたことを述べ、全く無実な、不当なことによつて祖国を追われた不法をのべております。欠席裁判によつて死刑を宣告され、追放に処せられ、帰つてくれば磔刑に処するといふような、ひどく不当な処置をとりました。ダンテも「神曲」の或る處ではフィレンツェを狼にたとえ、かつ「汝の名声は地獄にまでも広くひろがつて居る」というような事を云つて、祖国の市をののしつておられます。

またフィレンツェについて、このパラディエーヴの第二十五歌のはじめにおいて、次のような人間的な願いを書いております。その意味を申しますと、その勞作のために費やした長い年月が自分を瘦せしめたコメーディアを、追放の旅の中にあつて長い間かかつて書いたために、心身は共に疲労して、瘦せてしまつた。そしてこの聖なる詩には天と地とが手を合せた——直訳すれば、天と地とが手をおいた——と述べています。

天は神様のことを云つてゐると考えていいでしよう。上からの大ラツィアと人間的な自分の努力と信仰的なものによつての上からの聖寵の力とが協力した、詩人としての自分の力と天と地の力が合わさつて書けたのがこのボエマ・サクロ、聖なる詩であるといつてゐるのです。もし自分が檻の中で静

かに眠つておつた小羊のようだ、そこを追い出した狼共に自分が打ち勝つて、一敵が自分を追い出したのだから——もしここにもう一度帰つてくることができるならば、自分がかつて洗礼を受けたあのフィレンツェのドゥオーモ・サンタマリーア・デリ・フィオリといふ花のサンタ・マリアと呼ばれる、あの美しいカデドラル——すなわちフィレンツェの司教座聖堂のその前に在るサン・ジオバンニといふ八角の堂になつてゐる洗礼堂があります。そのサン・ジオバンニの洗礼堂でダンテは洗礼を受けたということになります。——その洗礼の泉のほとりで、今度は以前とは違つた衣と違つた声とを以つて冠をうけたい。すなわち詩人としての月桂冠を受けたい。それはコメーディアの勞作によつて多年自分の心身を刻んだ、それはいわゆる彫心鏤骨の作である。その長い労作のため、こんなに心身をすりへらしてやせてしまつたのである。祖国はそれを相当に認めてもらひるのはないか。そこにはかなり人間的な負け嫌いなダンテの一つの姿が現れてゐるようと思われます。

天国篇の第二十五歌の最初に書いてゐる所以あります。

これは考えようによれば、流離の中に苦しい二十年を過ごした、祖国を追われた不幸な詩人として、涙ぐましくいかな、尤もな、人間的な願いだと思います。自分をひどい目に合わせた忘恩のフイレンツェ、しかも全く無実のことで自分を政治的な勢力争いのためにひどい目に合わせた不法。それに酬ゆるために、できるならば祖国に戻つて小兒の時に洗礼を受けたその同じ所で、今度は前と違う衣をきて、すなわち政治家としてではなく、詩人としてその声によつて冠を受けたい。そういう人間的な、一つの願いとでも申しますか、或いは人間的の榮誉とでもいふか、今日の言葉でいえば、文化勳章のようなものですか。そんなもの、いや勳章などを貰い

たいといえば、ダンテはそんな人間ではないから氣の毒すぎますけれど、祖国から正當に自己の価値を認められて、褒められたいというのであるならば、この詩句はそういうことになるでしょう。そういう極めて人間らしい願望をバラディーズの第二十五歌でうたつてゐるのであります。

できるならもう一度祖国に帰りたい。そうして自分の洗礼の泉のほとりで前とは違つた衣と違つた声とを以つて冠をうけたい。すなわち詩人としての月桂冠を受けたい。それはコメーディアの勞作によつて多年自分の心身を刻んだ、それはいわゆる彫心鏤骨の作である。その長い労作のため、こんなに心身をすりへらしてやせてしまつたのである。祖国はそれを相当に認めてもらひるのはないか。そこにはかなり人間的な負け嫌いなダンテの一つの姿が現れてゐるようと思われます。

しかし同時に彼は、名譽というものについて、ことにあらゆる地上的なものの価値について、一つの区切りといふか見極めをしています。彼にとつては、すべての地上的なものの価値は天上的なものに従属し、自然的なもののねうち、あるいは人間的なものの価値が存在するものと認められ、それらの天上的のものとむすびつけずしては、地上的なものの意義や価値もそれをよく理解することができないと考えられています。天上的なものと地上的なものは、ダンテにとつては、決してはなればなれに存在するものではないの

であります。デ・モナルチアの中で、人間を形容してダンテは二つのフェニックスエア——二つの半球の間のメディウム(medium)つまり中間であると申しております。天が一つの半球であり、地球が他の一つの半球であるとするならば、人間は天と地との二つの世界のその中間にあるメディウムであるといふのであります。

そうすると地上的なもの、人間的の価値については、例えば人間の名譽とか評価とか、そういうようなものについては決してそれらを無視してはいられないけれども、同時に、かなり諦めたといふか、悟つたといつていいか、ある見切りをつけていたようであります。ダンテはその一面においては、きびしいスコラ哲学者としての学問の上から見て、冷厳に物事を考え、きびしいスコラ哲学者の人生観としての面影があり、この地上的な価値を天上的な価値に従属せしめておる点では極めてはつきりしております。凡ゆる人間的の価値は超自然的の価値に従属しなければならないのです。そうでなければ宇宙的な秩序はないのだということを考へておる点において

ついては、ダンテは今も申した通り諦め悟つた考え方をもつておりました。あたかも仏教の思想にでもある悟りに近いようなことを申しておる一節が、コメーディアの中にもあります。すなわち、人間の名譽とか、声望などというものは、それはちょうど、山の上にかかる白い雲のようなものにすぎません。この世の誉はその山の上の風が向きを変えるのにれて、その名前を変えるでしょう。或いはここよりかしこより吹き来る風の息吹に異ならず、こういう意味のことを申しています。だから、それは山の上にかかる一つの白い雲のかけのようなものにしか考えられていなかつたのである。

このように地上的なもの、人間的なものについて限定的な意義しか認めていなかつたことを心にとどめて、ベアトリイチエ体験を考察する必要があると思います。

この地上から消えて行つた一人の女性が単に抽象的なイデアとしてだけダンテの生涯にとどまらないで、多情であり、名譽心も相当強く、烈しい気性を持つて居り、学問に対する愛も強く、政治的なものに対する関心と技量もあつた、その一人の人間を生涯にわたつて影響し、そして遂にこの時間的なベアトリイチエの二十六年の生涯の短い生命の中に若い詩人は永遠なるものをえたと言つてもいいのです。そうするとそこに時間と永遠というものが一つになつた具体的な統一としてのベアトリイチエが認識できることになります。永遠にある。こう申してよからうと思ひます。

人間の名譽、従つて人間の声望、或いは評価ということに

中止のたつやおのめや。グラン・チュンのこじあわたつや、ダス・エーウィッヒ・ワイブリック・ツィーム・シビ・ヒナン das ewig. Weibliche Zieht mich hinan! 何と詠しましよ

うか、永遠に女性的なもの我を惹きて高きにのぼらしむ、
ス・エーウィッヒ・ワイブリック・ツィーム・シビ・ヒナン
das ewig. Weibliche Zieht mich hinan! 何と詠しましよ
うか、永遠に女性的なもの我を惹きて高きにのぼらしむ、
とても詠すべきではないでしょうか。こゝではヒナンと書
いてありますけれども、ヒナンは上方の方へとこう意味でしょ
う。その意味で、甚だ大家の訳に對し批判を申してすまな
と思ひますけれど、森林太郎先生の御訳しになつたこのとこ
ろの句は少し調子が弱いと思います。私は學問に対する公の
ものに對する義務から、また學問に對する愛から、あの場合
のヒナンといふのは上とこう意味のむしろヒナウフ hinauf の意味で、ダス・エーウィッヒ・ワイブリック「永遠に女性な
るもの」われを惹きて高きへ登らしむとでも詠すべきで、永
遠に女性的なものが人間の墮落をその底にまで行かせ
ず救つて遂に上に惹き上げる、下降を阻止して高きところ
へひこて來た、だから永遠に女性的なもの我を惹きて高き
に行かしむとか、高きに登らしむとかいう意味がその中に含
まれてゐるので、言葉としては上く hinauf とこう字が使
つてゐるが、hinau とあります、その意味は上へ惹く
ところのことであるうと思ひます。森先生ほどの方の訳ですか
ら、決して誤訳などとはしません。けれど訳としてはゲー
テがじょうとしたなど、とりわけそれがダンテにもつたる
永遠に女性的なものの力の表現、その認識としては生活体験

としてやや弱い嫌いがあると評してもよろしからうと思ひま
す。もう少しこの永遠なる女性の力の意味を掘り下げ、強く
それを體験しなければなりません。

二十六で死んだ、そしてその生前に幾たび会つたかといふ
と、招かれてはたつた一度そのお父さんのフォルコ・ディ・ボ
ルティナーリ Folco di Portinari の所で会つたのが彼の九
才も終りに近い五月の花のさく頃であつた。しばらく花のま
つりで招かれてこの世にもたぐいのない美しい少女を始めて
見たのであります。その後は、街で絵を画いてる時や街を
散歩してくるときなどに会つたくらいの人で、しかも人妻とな
つて二十六で死んでしまつた人です。その人が若い秀れた
詩人を一生にわたつて捉え、その人のより高き精神生活に進
むにつづての不斷の導きとなり、高きに惹き上げる力として
働いたことは、時間の中に永遠が認識されたことに外
ありません。そうして時間の中に永遠が擱まれたことは、具
体的のベアトリイチエとこう一人の女性の中に、その時間と
永遠と相反するように思われる二つの原理が一つのものとな
り、一つの統一を見出しました。ベアトリイチエ体
験を解釈して、こうつてよしのだらうと思ひます。

そうするとダンテはベアトリイチエの面影とこうか姿とく
うか、その人間像の中に自らをおいて成長して來たともいえ
ます。二十六の若い女性を「新生」の中に描いたその青年は
二十年の流離の旅の中においでコメーディアを描いて、遂に

ラヴェンナの市で、アドリアティコのあの松の美しいポウ河の海にそぞぐ所に近いその海のほとりで、五十六年の生命を終えたのであります。このようにその生命の終える日まで、この自由な魂は成長し続けたといふことができます。私たちの胸を最も強く打つのは、その生命の終りの日まで不斷に生長しつづけて止むことのなかつた詩人の詩のこころといいますか、詩魂とでもいいますか、その精神的の彈力性とでもいいましょうか、その点が一番に私たちをひきつけるのであります。少くとも私は、生長し続けて最後の日まで精神の山を高く上つて行つたといふ、そこに本当に永遠に女性的なもの力を擱むことができるよう思います。

この世の誉、この世の名誉は、ダンテは遂に後には天堂の第二十五歌において、それについて書いては居りますけれども、それは要するに山の上にかかる一片の雲のようなむなしものだということをはつきり認めるまでに成長して行つたのであります。しかもその高さにまで来る間には、できるならもう一度故郷に帰つて、そうして詩人としての月桂冠が与えられたいということも考へないではなかつたのです。この点に私どもにやつぱり近い人間的な悩みといふ、名譽を毀損されたり迫害されたり、ひどい目に会つた一人の血の多い人間の悩みと言うか、告白が今も数百年の後に心にひびいて、その声を聞けるような気がします。煉獄の中ではこの世の人びとの重んじている名譽を軽んじているような書き方

もしてはおりますけれども、同時にこの世の誉などを心の底では軽んじてゐる氣持もあるけれども、煉獄の後につづく天堂においてやはり故郷に帰りたかつた悲しい望みを述べておられます。しかし遂に運命は彼がフィレンツエに帰る事を許しませんでした。或る屈辱的な条件をつけて許しました。しかしダンテは不法に審かれ、名譽を失つてまでも故国に帰ろうとは思わなかつたのです。彼がもし当時のフィレンツエの政治的権力に尊敬を呈し屈服するならば、故国へ復帰することを許そうという条件はききました。しかしそういう事情の下では帰ることを背んじませんでした。自由な心の持主であつたからです。

この点はずつと後のことでありますけれども、ナポレオン三世のクーデターでフランスを追われた、そしてチャンネル・アイランズに浪々の旅を送つたヴィクトル・ユゴーの自由な精神と似たものがあるよう思います。ナポレオン三世が後のアルミニスティですべての政治犯を許してフランスへ帰つて來ることを許した時にも、この詩人はとうとう帰つて来ませんでした。その許しに対しても彼が何と答えたかといえば、自由にして帰らむ日、我もまた帰らむといふ意味のことをユゴーははつきりと述べています。自由の無い所は人間の居る所ではない。それはいわばインフェルノ Inferno 地獄なのであります。人間といふものは自由な存在であり、自由のある所が人間の世界である。ナポレオン三世が不法にもクーデターで皇

帝になつて、そして威張つてゐるような所は祖国とはいえない。下らない権勢慾や虚榮心の強い、そういう所で、許してやろうといったところで帰つて来る気がしないのです。だから自由が本当にあれば自分も帰らう。自由が帰る日こそ我もまたフランスへ帰る日であるといつたのであります。このエゴーの気持は、ダンテの精神に通うものがあります。数百年の昔のダンテの気持と、その思想との系譜がつながつて、それをたどることができます。思想的に見ればこの人間としての一つの自尊心ともいるべきものを深く傷けられたままで、祖国へ帰つて行くという気はしなかつたのです。

煉獄の十一の歌の百から百十七にわたつてダンテがうたつておりますのは、この謙遜の徳のことです。反対からいえば、最も恐るべき罪として罰せられているのは、傲慢の罪（スペルビア）です。そして、その中で、かつてシエナの城の城主であつて、その生きていて勢いがあつた時にはトスカーナ州が恐れをなしたような人物、今日の日本でいえば、まず吉田さんですか。今は少し影が薄くなつたようですが、でも、今までの吉田さんのような威張つた一威張つてゐる今までいつては語弊がありますが、時の人ですね。つまりシエナの城主でシエナの全てを彼の手中に收めようとしたその傲慢の故に大きな重い石をその背中に負わされて、そして休む暇もなく、死んだ後もいつまでもそこを歩き廻つてゐる。煉

獄で石を背うて歩いている。そのかつての城主がミニアトウル画家のオデリージの前を石を背負つた姿で現れます。あれは誰かとききますと、その人はかつてのシエナーシエナといふのはフィレンツエよりは小さい町ですけれど、トスカーナの山地に在つて非常に美しいカナルのある名高い町です。サンタ・カタリナといふ聖女の生れた所で、今日もその家が見物できるように残つています。私はそこに二三回参りまして、僅か数日でしたが滞在しておつたこともあります。非常に気持のよいトスカーナの山の小さい町です。その城主でプロヴェンツァーノ・サルヴァーニProvenzano Salvaniという人がいます。そこにルチフェルが居ります。イスカリオテのユダとカスイウスとブルータスと主に叛いたもの、その恩人を裏切つたものたちがいます。かつては美しい天使であつたルチフェルはこれらの人々の頭にかみつくといふ三つの頭で悪魔の王になつていています。地獄の底の最も深い罪として罰せられているのはこの傲慢の罪です。地獄の底において氷に苦しめられてルチフェルが償つてるのは、人間の一番にくむべき罪としての傲慢の罪であります。それからこのブルガトリオ煉獄においてもその最も下の低いところでつぐないをしている苦しい罪は、やはり同じ傲慢であります。つぐなつておるのはやはり傲慢であり、傲慢の罪が最も重い大罪であります。それゆえ地獄においても傲慢が一番に深い底におるし、煉獄でも傲慢が最も苦しいつぐないをしなければな

らないのです。そして段々と上に昇るに従つて罪のつぐないは軽くなります。昇つて行くに従つて、ダンテの額からPの字が、すなわち一つづつ罪が消されて行き、登る足の歩みも軽くなります。それゆえ、人間の自己形成を最も妨げるものはなんであるかということについて、ダンテは根本的に考えたわけでありましょ。

人間がこの世に置かれた意味は自己を形成して自分なりに自己を完成し、自己になりきることであります。ところで、人間が自己になり切ることを邪魔する最も大きな強い力は自分がの中にある罪、ことに傲慢の思ひであります。その傲慢の罪を地獄においても一番にひどく罰して深いところにおき、煉獄においても、そのためにも最も苦しう償をしなければならないものとして罰してくるのであります。

この傲慢を最も強く罰して、その償をさせて居るといふことは、この点だけから見ても、ダンテがカトリック教会の教義をよく守つており、大罪ごとに神への反逆である傲慢を何よりも恐れていたことが、よく理解出来ると思うのであります。従つてまた、コメディアを本当によく理解しようと思うならば、最少限度にカトリック教会の教えを理解していないと無理であるうと思ひます。イタリア語が読めるというだけでは、ダンテの作品の深い意味は、本当にわからないでしょ。人間の自己形成を一番に妨げて居るのは傲慢であるといふことと、心の中に傲慢がある限り人間は育つていかない

ということ、そうして育つことを止めた人間はもはや自己の形成において終りをとげてしまつたのであること、この真理をダンテは私たちに伝えようとしているのであります。我々は死ぬまで育つてゆかなければなりません。それは自己を形成するのが私たちの使命だからであります。

ブルガトーリオの第十一歌の百から百十七節にいたるところで、深い谷の上の断崖に臨んでヴィルデリオとダンテとが登つて行きます。すると師のヴィルデリオ——西欧の父であり、西欧の精神を代表するとも見るべく、或は人間の知慧を代表するものともいはべきヴィルデリオが、先に立つて歩いて行きます。ダンテがその深淵にのぞんでいる深い谷の崖から落ちてはいけないので、ヴィルデリオがみずから崖の側に沿つて、ダンテをかばうようにして歩いていきます。私はこの場の叙述を読んで、人間の師たるもの一つの模範が出ていくようにいつも感じ、心を動かされるのです。ダンテが正義を愛し、真理を追求するスクロの学者として、その人間がきびしい人のように思われますけれども、実はその外形の内は、非常にやさしく人であつたらしくとうことはいろいろの点から分ります。あの西洋の文学を後にどれほど深く影響し刺戟したかも知れない地獄の第五歌、あの悲しい不義の恋の物語のパオロ・マラテスタ Paolo Malatesta とフランチエスカ・ダ・リミニ Francesca da Rimini この物語を読めばダンテがどんな人間であつたかがよくわかるでし

よう。フランチエスカがその悲しい愛の物語を終えた時に、片方のパオロはそれを聞いてひどくなきました。そのためダンテはその話を聞き終つてパオロの泣くのを聞くと、その傍に倒れて死んだもののようにそこに横たわりました。「かくて死せるからだのごとくに倒れぬ」と詩では結んでいます。不義の森に生きたパオロとフランチエスカの悲しい愛の物語を聞いた時に、詩人はその運命の悲しさに深く心を打たれて自らも氣を失つたのです。地獄に咲いた、たつた一つの百合の花のような物語であると、後にある文学者がそれを形容しています。

けれども今ここで、そのパオロ・マラテスターとフランチエスカ・ダ・リミーについての話をするのが私の本旨ではありませんから、これ以上はお話ししませんが、そういうダンテが彼等をその罪の故に地獄におとしておきながら、しかもその同情すべき事情を深く考えて、何と申しますか、憐みの故に心を打たれて気絶してしまうまでになるというような心根のやさしい人間がダンテであり、そういう人の不幸に深く心を動かされるやさしみを持つている人間であつたということは想像できるわけであります。コメーディアの中においては、ダンテが氣を失うところが、いくたびか歌われております。

また師に対する尊敬の心を表したものとしてはこのブルネットオ・ラティーニ Brunetto Latini についての詩句が代

表的であります。ル・トレゾーロという題の書物をかいた。宝とでも訳しますか。フランス語でもル・トレゾールといつてあります。文芸学とでもいいますか、その師である人で、エピクロ快楽主義者であつて、それらのエピクロたちはダンテの文芸の師であり、彼の人間形成に大きく影響を与えております。文芸学とでもいいますか、その師である人で、エピクロ快楽主義者であつて、それらのエピクロたちは自然に反する罪を犯したために地獄の苦しみにおとされるのであります。自然に反する罪が何であるかは、想像にかたくありません。ソドミーティがそれであります。男性が自然に反して犯す罪、男性に対する同性愛であります。ブルネットオ・ラティーニは優れた文学家であり、ダンテの師で、詩人としても学者としてもすぐれた人物でありながら、そういう罪に陥つたのであります。そのためダンテは師ではあるけれども、その罪の故に地獄におとしました。しかしブルネットオ・ラティーニに会うところは感動的であります。ダンテが「おんみここにいましたまふや、セール・ブルネットオ?」と訊ねます。すると師は、「おお、わが子よ、ブルネットオ・ラティーニ、おんみとしばらくしろにとどまりて、かの群衆を先に行かしむることの汝の心に適はざることはからしめよ。」と答えます。セールはフランス語ならばムッシューに当るでしよう。師ブルネットオにてはおはさずやとでも訳しますようか。あなたはここにいらつしやるのですが、ブルネットオ先生?と聞くわけです。そこで他の靈た

ちを急いで先に行かせて、二人はしばらくあとにおくれて互に話をしようと、ブルネットオがいいます。二人は少し足の歩みをとどめて、ゆつくりその群の後からついて行く。そのところでダンテが描いているところは、まことに印象的であります。すなわち彼はブルネットオの師の後から頭を下げてあたかも畏るるもののごとくに歩いたと誌しております。

ダンテが罪を犯したもの罰することを考えて、この師を理屈の上においては、道理の上においては地獄におとしながら、しかも義理においてはそういう風であるが、情においては東洋流の七尺去つて師の影をふまずともいいますか、師の後から頭を下げて畏るるもののごとくに歩いて行つたというのであります。そういう物ごとの感じかた、何というか、堅実というだけでは未だ充分につくせない堅気な、やさしいおもいやり。師を尊び敬う。しかし罪を犯した以上は理屈の上では地獄におとされなければならない。正しさを求めるところと、懲みを知ることと、この二つの動きがそこによく描かれているように感ぜられます。このように非常に師弟の道といふものをきびしく考えた人なのではないかと思われるのです。だからヴィルデリオを師として仰ぎ、後には地上のエデンの園で別れなければならなくなり、ヴィルデリオがいつの間にかその影をけした時に、ダンテの心は悲しみに慄えました。そしてそれはキリストの神を知らなかつた異教のヴィルデリオには、天までダンテを案内する資格がない

ことを知り、キリストを知らなかつた人には超自然的な力がないから、ヴィルデリオはエデンより上に登るわけにはゆきません。ふりむいた時にヴィルデリオはもはやそこには居ません。そのとき、母を探す子供のようにダンテがヴィルデリオに呼びかけます。そうしてそこで三度ヴィルデリオの名前を呼んで彼を求めます。これは心の感動の強く溢れでいる句で、人間の感情の烈しさ、その清純なパトスの流れるように強く出た、ほんとに人の心を打つ詩句です。ヴィルデリオという言葉を彼は三度も子供のように呼びかけて師を探し求めます。「されどヴィルデリオはその影を残さず。いと甘美なる父なるヴィルデリオ、わが救いのためにわれを彼に委ねしそのヴィルデリオ！」と歌つています。

ベアトリイチエがダンテを迷いと過ちとの森から救い出すためにヴィルデリオのところへ来て、彼をこのマントヴァの詩人の保護に委ねたのです。その声は幼い子のそれだとといふ、つまり地獄でもその罪が一番に重く罰せられているのはその最も深い所でルチフェルのいる所であります。インフェルノの第九の環の第四の圈には「苦悩の國の帝王」とよばれます。それはサターナともベルゼブーともルチフェルがいます。それはサターナともベルゼブーともよばれており、神の權威に反いたために地獄に墮されたのであります。この点からもダンテがいかにカトリックの信仰をよく保持していたかが分ります。

ヴィルデリオに対する別れの場でダンテが愛し尊敬する師

を探し求める声には永遠の響きがあります。されどヴィルヂリオはもはやその影を残さず。いと優しき父なるヴィルヂリオは、彼女が我が救いのために我を委ねしそのヴィルヂリオはとくに、煉獄の第三十歌の四十九節から五十一節で歌つてゐるヴィルヂリオの名を三度もよく詩句はまことに感動的であります。ドルチスイモ・パッソ Dolcissimo Padre いと甘美なる父ヴィルヂリオよ、と消え去つた師の名をよんぐ子供のように探し求めてあります。このようにその師を尊敬して居つたことはブルネットオ・ラティーニの場合とはまだ趣を異にではありますが、私はこの師と弟子との人柄、お互のやさしい関係に深く心を打たれます。ヴィルヂリオは師の模範として美しい例を示しています。弟子が絶壁からおちないよう心をくばり、自らは危い崖の縁を歩いてダンテを守つた態度は美しい限りです。またかかる師のいなくなつたことに対する弟子の歎きはそれにふさわしい、やさしい心の現れであるといえるでしょう。それは今日に至るまで私たちの胸に何か熱くなるものを感じさせる響きをもつております。この一節だけでも真に不朽の文学であると思ひます。これは師の模範とも見るべき、ヴィルヂリオとそれに対する弟子としてのダンテの尊敬と愛とを描いたすぐれた文学であります。

そこに居る人たちの群は身に荒い布を着ており、お互に他の者の肩に身を投げかけて、岩に寄りかかつております。彼らの眼はめしくて盲目です。ちょうどカトリック教会のイン

ドウルデュエンツァ indulgenza またはペルシーリ Perdonio 賞宥) のときに乞食たちが人びとにものを乞うため聖堂の外で待つてゐる様子に、互いに頭を他の者の上にもたせかけながら何かの物を持つております。身には荒い布をまとひ、眼を針金で縫われています。ちょうどそれは太陽の光が盲者には見えないと似ております。煉獄にまではやつて来たけれども未だ充分にその罪のつぶなしをしてはいないので、天国の光をはつきり見ることができず、天上の光は彼等の上に未ださして来ません。煉獄のその崖の下に互に倚り合つてゐるそれらの人びとの目はみな針金で以つて縫いつけられています。目が針金で縫いつけられてから、あたかも荒いはいだかに似てゐます。目を縫いつけられてはいだかが、籠の中で暴れ廻つてゐる姿によく似ておるとダンテは形容します。目を縫われた人たちに天国の光はまだ射しては来ません。その目が縫われてはいますから。しかしやがてはそこに行ける望みがあります。ここに詩句でもダンテの公正な、そして正直な、また非常に心の美しい人柄であることがうかがわれます。というのは、自分がそれらの群を見る事ができるのに、向うは目が縫われておりますから、ヴィルヂリオに案内されてダンテが登つて来た姿を見ることはできません。しかし自分の方からは、その乞食のように見える盲の人たちが見えます。

しかしダンテの考では自らは人から見られずにおりなが

ら、しかもこちらが他人を見ることが出来るのは、そういう地位で人のことを窺い見るという仕事(仕業)をするのは、名譽のある人間のなすべき業ではないというのです。だからダンテはいわゆる垣間見をして人の動作を探るなどといふ仕事を嫌つたわけあります。向うから見られないでこちらが向うを見るような、そういう仕事をするのは名譽のある人のなすべきことでないという、きびしい考え方たです。それでどうかしてその人たちと親しく話をしたいものだと思いまして。そして黙してその賢い師のヴィルデリオの方をぶりむきました。するとヴィルデリオが答えます。語れ、されど短くかつ賢く語れと師がいいます。くれに追つてもう時がないから短く賢く話すことを許したのです。この所を中心にしてダンテの人間観を描き、私の今日のお話の結びとして行きたいと思う。

ブルガトリオの第十三歌の八十節から第九十六までにダンテの人間についての思想がよく出ております。下手な訳し方を致しましたが、それを取りあげて問題を見て参りたいと思います。

はやく賢く話すことを師から許されたので、ダンテは彼に向いて語りだします。「おお汝等のただ一つの望みなりしことき光を見る確かなる人びとよ。」と彼は語り始めました。高き光とは、天国の光であります。煉獄に入つたものはたとえ一時の苦しみは受けても、遂には天国の高き光を見

る望みがあります。だから今ここにいる人たちは高き光を見る望みのある人たちであります。しかるに地獄は望みのないところ、希望のない永遠なのです。

「地獄」の第三の歌にあの有名な九行に亘つての門の上の歌があります。そしてその一番おしまいの所で書かれてある言葉は、「汝ここに入り来たんものよ、すべての望みを捨てよ。」という句であります。だから地獄の門の入口に、この門に入るものはもはや何の望みもないのだから、望みを捨てよと詠されているのです。人間の生きているのは、実は望みの中に生きていることであります。私たちがお互に今日生きているのは、明日に意味があるからであります。私たちが苦労して勉強し、考え、そして友達と相談したり、協力したり、いろいろと額に汗して生活の糧をかせいでいるのは、それは一に明日に望みをかけているからであります。それゆえ生きているということとは今日に生きながら実は明日に生きることに外ならぬとダンテが考へているのは、望みの中に生きるということです。

結局そうなれば生といふものは完成したものではあります。生は或る意味では我々の課題として与えられているにすぎません。未だ果さない課題は明日の望みなのであります。明日は今日よりもよくなるだろうと思つて我々はみな生きているのであり、仕方がないから生をつづけていくわけではありません。それゆえ望みの中に生きているものだけが、眞実

の意味で生きているのであります。望みの中に生きているものには生命があります。しかし地獄にはその望みがありません。「すべての望みをすてよ!」*Lasciate ogni speranza* 地獄は望みがない世界であります。人間は死んでも天国に直ぐに入れるわけではないのです。カトリックの信仰としては地獄に墮ちなかつた煉獄において、この世で犯した罪の中で未だ悔い改めてないもの、もしくはその償いを果していらないものために苦しまなければなりません。或いは罪は悔い改めても未だ充分にその償いをしなかつたものもありましよう。それを果す場所が煉獄であります。

それゆえ高き光を見るとの確かなる人びとよ、とわれ語りはじめぬ。一ダンテがその煉獄の人びとによびかけたのです。一ダンテは針金で目を閉じられてくる人びとに對して語りかけます。やがて聖籠(グラチア)によりて、汝等の心より流れの清く流れる如く、良心の泡の拭はあるる時来たらば、われに語れかし、と意味の深い言葉で語りはじめます。私たちの良心はいろいろのもので疊つております。ちょうど川の流の上に泡が浮んでいるように、或いは川の上に塵芥が流れているように、人間の良心の流れも澄んではいないので、流の中には泡があります。私たち人間の精神は未だ自由には流れることができません。しかし良心はあるのです。ただその良心に泡があつて疊つてゐるにすぎません。それがもし澄むときがくるならば、もとより自分の力だけでは駄目であります。

が、上からの援けがあり天上からの聖籠によつて流れの清く流れる如く、良心の泡の拭はれる時がくるならば、我に語れよかし。そは我に嬉しくも親しきことなれば、と問いかけます。その問は汝等の中にここにラチュウム Latium の魂ありやを、そはもしかれ彼を知るならば、恐らくはそのこと彼によろしからんに、ダンテはこう申しております。今に本当に良心が疊りなくなつてよく物が見えるようになるであろう。今はまだ良心の泡のために、本当に見えてはいない。それは良心の上に泡があるからです。しかしその時に自分は今ここでききたいことがある。それはラチュウムの者がここにいかといふことです。ラチュウムとは人も知る通り、イタリアのローマを中心とした地方の名称であり、ラチュウムの人とは、ここではイタリア人ということであります。

つまりダンテの問はここにイタリア人がいいかどうか、もしいるならばいつて欲しい。そのことは我にもよろしいし彼の為になるであらうから。親しく話をしよう。イタリア人で、こここの煉獄に來ているものがいいか、答えてくれ。こう問うたのです。するとその時そこから静かに答えてくる言葉は非常に意味の深いものであります。その声はこう申しています。おおわが兄弟よ、各々の人は、一人の眞の國の民なり。されど汝はいふならむ。旅なるイタリアに生きし者のこと。私の訳は實に拙でありますけれど、訳の言葉よりも、ダンテ自らの言葉をお聞き下さつたら、もつと美しい、はつ

きりした調子が捉えられ、バムがよく出でくると思ふ。オーフラテ・ミオ O frate mio — フラテ・ミオとは私の兄弟ともいふとや。チャスクーナ・ヒ・チータディナ・レウナ・ヴェラ・チータ Ciascuna è Cittadina D'una vera città; ヴェラは真的ところの意味です。チャスクーナは各々はの意、ここでは女性的な形になつてます。めぐめぐ一人ひとりの人間が真の国(市)の民であるところのです。人間のひとりひとりが一つの真的國の市民である、國民であるところのです。おおわが兄弟よ、めぐめこば、お互には真的國の市民なのです。けれど汝はくはんとするなるむ ma tu vuoi dire, しかし前はくおうとするのだらう。Che vivesse in Italia peregrina.その人はイタリアを、旅の地として生きしもののかと汝はくおうとしているのではないか。こう煉獄の声が答えました。私はこの詩句が非常に好きであります。何か聖書の一節を読むような気持ちさえします。

ダンテも聖書に養われた一人の敬虔なカトリック信者に外ならなかつたのです。人間の永住する真的國はこの世にはないという信仰です。だからめいめいが真的國を持つて居るはずです。私たちはこの地上に生きておりながら、もう一つの真的國の國民として生きてゐるのです。それはこの世の國とは異なる他の國です。もしかかる他の國がないとするならば、

先に引用したアンヘル・モーロアの言葉のように、生は平俗に墮する外ありません。そうどう他國がなうとすれば、この地上の生活が、いかに平凡な低俗なものに落ちてしまひんとか。もとよりそこには隔たりがあります。永遠なる國くは、直ぐには行けないかもしれません。それは Entfernung くだたりがあるのです。そことこことは離れております。しかし、違つた國があるところ、そういう隔たりの展望の中において、お互の生は本当に日に若くなるのです。生が他との隔たりによつてではなく、それとのつながり、自己と異つた他のものの存在の展望の中に、生は若やいで行くのです。自分とは異つた國が一この地上とは異つた天上の真的國があるということを知つてゐるからこそ、この地上の生活においても人間の生命が保たれてゐるのです。人間のエネルギー、そのもののちがいも若るものとして本当に育つことができるのです。

この詩句に表された会話の意味は、まことに深います。対話の一人はこの地上の世からきて、まだ生きておつて地獄へ降り、更にそこから煉獄へ来たダンテ・アリギエリで、他の一人は、もはやこの世の生涯を終つて地獄に落ちずに煉獄にあつて今その罪の償いをしてゐる一つの魂、やがて天の光を見るところのできるのぞみの中に生きてゐる魂です。何故ならば、今その人たちの目は針金で固く閉されています。けれども、やがてその針金はとれて、天上的光が見えるよう

になる時がきます。その清め一良心の汚れが洗われ、水の流れの上の泡のような、或いは川の水の上を流れる薬屑のようなものが取り去られる時がくるならば、この世のいろいろなのが見えるようになるまでに経なければならない途中にいる人たちであるから、望みのある人びとであります。その時には、良心の泡が消えてなくなつた時には、人間の心は清くなり、精神は本当に自由に流れ出すことができるでしょう。人間の魂が自由に生き、心が思うままに流れ出すことのできる時まで、人間はこの地上に住まなければなりません。これが地上の生の意味です。このように、地上の生涯が終つた後に心の流れの泡が消えて清くなる、そのきよめの火の中に暫くとどまり、その苦しみの時を過ごさなければなりません。これがブルガトリオの意味であります。ダンテは

こう考えたのであります。

聖アウグスチヌスが書いた、短いけれども非常に深い文章である「信仰によるわれらのこの世の巡歴について」という文章の中に次のような句があります。私はこれを訳しましたので、いつか発表いたしたいと思つております。その中でこの大聖人がいつているのは、信仰の光を与えるれておりながら、しかも信仰によつてのみ見うるにすぎないものを見よう、それを利用しようと思つてゐる人は、あたかも盲であります。

ながら、その盲目が癒らなければ太陽の光が見えないので、その太陽を、盲目が癒えない前に見えるようになりたいと願つてゐる人に似てゐると説しております。信仰のないことは盲目とがよく似てゐると考えたのであります。見えるのは盲目が癒えてからでなければならず、信仰の力を用ひるのは信仰を与えられることによるということを、「信仰によるわれらのこの世の巡歴」という文の中で聖アウグスチヌスが書いてゐるのであります。

ダンテはフィレンツェを追放せられてイタリアを発見しました。小さい祖国であるフィレンツェの市を失いましたが、それはより大きい国であるイタリアを発見することになりました。そして二十年の苦しい生活の中にイタリアの国境を越えてダンテは世界を発見したのであります。しかしこでイタリア人はいいかと呼ぶのは正しい方ではない。かつてイタリアを旅の地として生きた人の意味であろう、とこう煉獄の声はダンテに向つて答えてゐるのです。これは生の巡歴、ペルグリナチオ・デッラ・ヴィーア Peregrinatio della vita であります。この世はしょせんペルグリナチオ巡歴であります。地上にありながら、信仰の生活に生きているものは、幾分はこの地上を離れてゐるといえます。地上の国籍をもつてゐると同時に、地上をはやくも離れて、天上的國に属する民であるともいえます。そしてこの世の後に来る國、す

なむち天上の國、眞の國の市民権を既に約束せられてゐるの
がこの信仰の世界の民であります。

またどうもいえるであります。眞の人間の像をダンテ
は「道を行くもの」と規定してゐます。だから人生は道 *Via*
であります。その人生の道を歩いて居る私たち人間は、旅行
の人であります。それは *Viator* であります。人生は旅であ
り、そして人生を生きて行く人はみなヴィアトールすなむち
旅びとであります。すべての生あるものはいかに長く生きた
としても、それは僅かの間であります。千年といつても永遠
にくらべることはできません。それは實に短いものである。
一度巡るのに百年かかる星は、三六〇度を巡るのに三万六千
年の月日を要します。こういう星の動きも、それを永遠に比
すれば人間の眼のまたたきにひとしいのです。千年も三万六
千年もそれを永遠に較べるならば、ちょうど眼のひとまたた
きに比するほどであるということをダンテはコメーディアの
同じ所で歌つております。朽ちるものと朽ちないものとの中
間的な存在、それが人間存在であります。朽ちるものは人間
及び人間の作るあらゆる創作、制作——これらはみな朽ちてし
まいます。しかし朽ちるものの中に朽ちないものを内包して
いるのが人間のいのちであります。その内に永遠なるものを
抱いているということ、時間の中に生きながら永遠を思惟す
ることのできる存在、それが人間であります。それゆゑ人間
は朽ちるものと朽ちないものとの中間にあるものといえまし

よう。

この地上に生きてゐる人間は、未だ天上に行つてはいません
ん。しかし足は地上におかれであるけれども、心はもはや天
国に移つてゐるともいえます。地上の世界と天上の世界との
二つの世界に連るものとしての人間の姿を、ダンテはこの詩
句によつて描こうとしたのであります。人間は二つの半球の
その中間メディアム medium であります。天と地との間に
あるもの、それが人間であります。これがダンテの人間像で
あります。

それならば、ダンテにおいての人間性の完成は、その地上
にある人間の中の動物的なものからいつか人間の魂が清めら
れてその泡から清められたものとして、人間が天上的なもの
と一致すること、この天上的なものと地上的なものとの一致
によつて人間性の完成ができるのであります。神性による人
間性の完成、これがダンテの人間の姿であります。人間の自
己形成は、この天的な価値との連関をなくしては不可能で
あるといふことを教えようとしたのが、このイタリア・ペル
グリナ *Italiá peregrina* という表現であつたと思うのであ
ります。一つの永遠があります。インフェルノとパラディ
ーがそれであります。そしてダンテは、そのいすれの永遠に
入るか。択択は、人間の自由意志、その自由な判断、決定に
かかるということをうたつたのであります。人間は決して拘
束せられて、己の欲しないいすこにでも行くのではありません

ん。旅人としての人間が自己の自由によつて、この二つの永遠の中のどちらかに進んで行くのであります。二つの永遠のいずれかに向つて動いて行くものが人間であります。動くものは變り移つて行きます。これが人間の姿であります。

その人間の姿を私たちは一つには地上的なものとして認識しなければなりません。「この翁の白頭、真に憐むべし。彼もと紅顏の美青年」という句が「代悲白頭翁」という文の中にあります。白頭翁を悲しむこの文章のように、私たちは紅顔の美少年であつてもいつかは老人になつてしまひます。それが人間の姿であります。このように私たちは動くもの、移り行くものとしての人間の姿を認識しなければなりません。しかし同時にそれを動かないもの、変らないものの中に位置を定め、そこに定位しなければなりません。人間の眞の定位は、それを動くもの、変り移るものの中にだけはできません。かかる人間性の一面の認識だけでは、人間像を充分つかむことはできません。移り變つて行く人間の姿、それももちろん事実であります。しかし同時に、その動き變るものを動かない変わるものの中に包ませ、そこに入間の眞の位置を定めなければなりません。それが人間のステートウスState であります。人間の世界に占める場所であり、或いは地位であります。

人間についていえば、その動くもの変るもの、動かないもの変わるものの中に場所を定めさせたことになります。

そうしてこの哲學に芸術として最も高い形式を与えたのがコメーディアの詩であります。百のカントとしてうたつた詩であると思います。芭蕉についていふならば、弟子の去來やその他の人びとが書いて居る文章から、彼の生の哲學が分ります。師は流行と不易とを教えられたといふ意味のことを申しております。動き變つて行くものは、芭蕉の思想においては流行として捉えられたのであります。そして變らないものは、永遠につづくものとして、それは不易として考えられ、芭蕉の俳諧の道においても、これら二つが認識せられておつたのではないでしようか。芭蕉の「奥の細道」の最初に「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。」とあります。芭蕉は李太白を非常に愛し、尊敬しておつて、いつも座右にその詩集や文集を持つておつたらしといわれてあります。その李太白の詩ではない、「春夜宴桃李園之序」という文章の中の一節に李太白は「天地は万物の逆旅にして光阴は百代の過客なり。」と書いております。芭蕉が愛し尊敬した李白が、天地、この宇宙を逆旅、客舍アルベゴ-albergo 今日ならば旅館—この世の中は、或は天地は、万物を含めて一人間は万物の靈長というようなことを昔から申していますから一人間をも含めて、旅の宿であると申しております。そうすれば人間の住んでいるこの世界、宇宙は、李太白の思想においては逆旅、旅の宿に外ならないのです。それならば、月日は、光阴は百年の過客すなわち旅人です。

芭蕉はその李太白の「春夜宴桃李園之序」から一つの示唆を得て、あの奥の細道の月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なりといふ文章を書き始めたのではないかと、私は思います。そうすると芭蕉の文学の中にも、李太白の文学の中にも、人生を旅と見る思想が共通して存在しているのです。中国の秀れた詩人の文学が芭蕉の文学に影響しているといえましょう。李太白のこの思想と文学を芭蕉もまた受け入れたと思います。しかしそれはただ受け入れただけではありません。ちょうど人間の体が、取入れた食物や飲料を肉とし血として、それを精神力に或いは肉体力に変化して、外に出して何かをつくり出すと同じように、李太白の思想は取り入れられると共に、芭蕉の獨得の文学となり、独創的なものになつてゐると思います。ただ一つ、同じものをみているのであります。人生はすぎて行くということ、ラテンの詩人がいつてゐるよう、「時は急ぐ」とことを悟つたのです。時は急いでいるのであります。刻々に私たちは急いでおる時の中に生きながら、急がない時を、動いているものの中に動かなるものを見つかりつかまえて、そしてその永遠なるものの中に人間の場所を認識することに努めなければなりません。この認識がダンテの文学を知り、その詩に理解をもつことに極めて必要なのでないかと思うのであります。

ダンテは人間を道ゆくもの「旅人 Viatore」として規定しました。そして芭蕉も「旅人と我が名よばれん初しぐれ」とう

たつています。それは一つの真実を捉えて、一つは西洋的に一つは東洋的に表したにすぎないのでないでしようか。眞実は一つなのであります。その一つの眞実の中に人間性をつかまえなければいけないと思います。甚だいたらぬお話を申し上げました。これをもつてダンテの人間像についての話を終ります。

(学習院大学教授)

成城文藝第一号 目次

——成城大学文化講座における講演筆記——

人麻呂作歌の成立條件について 池田 勉
『奥の細道』小見
 転換期における一文人像 栗坂 勉
 悲劇の季節 山理一
一女殺油地獄の与兵衛

『食後の唄』の二つの序

——白秋と李太郎——
 いわゆる湯桶説・重箱説について 山田俊雄
 ことばの生活 山崎匡輔
 忘れられぬ私の先生方(一) 西尾実
一数藤斧三郎先生のこと 佐野英一

価八〇円・送十六円

発生期の英國日記二章

67